

令和2年度

湯原地域振興計画

～観光地域づくりに向けて～

令和3年3月

湯原振興局

目次

1章 湯原地域の概要	1
1 地勢.....	1
2 沿革.....	1
3 自然.....	1
4 歴史.....	1
5 産業.....	2
(1) 湯原温泉郷.....	2
6 ダム.....	3
7 新たな取組.....	3
2章 市の関連計画や取組	4
1 第2次真庭市総合計画.....	4
2 真庭市観光戦略及びアクションプラン.....	5
3章 湯原の現状と課題	6
1 観光客の推移.....	6
(1) 岡山県の観光入込客数の推移.....	6
(2) 真庭市内の観光入込客数の推移.....	7
(3) 湯原・湯原温泉の観光入込客数の推移.....	7
(4) 真庭市の湯原地域以外の主な観光入込客数の推移.....	7
(5) 県内・県外別の観光客数の推移.....	8
(6) 真庭市の宿泊者の分析.....	9
(7) 湯原の観光産業.....	12
2 考察.....	13

4章 湯原地域の取組の推進に向けて	14
1 湯原の地域の振興に向けて.....	14
2 湯原の取り組み.....	15
(1) 湯原温泉郷.....	15
①湯原温泉「"まち"プロジェクト」.....	15
②湯本温泉館.....	16
③足温泉館「健康温泉」.....	17
(2) 下湯原温泉・ひまわり館「下湯原温泉パーク」.....	18
(3) 社の式内八社「歴史交流」.....	19
(4) 二川の地域づくり「地域自治振興モデル」.....	20
(5) 天然記念物「はんざき」「自然・地域環境保全」.....	21
3 地域観光の振興に向けての取り組みの整理.....	22
(1) 課題の整理.....	22
(2) 課題解決に向けて.....	22
(3) 地域振興のステップ.....	22
4 推進に向けての体制.....	23
(1) 真庭観光局と湯原振興局の連携体制.....	23
(2) 湯原観光関係者等を中心とした連携体制.....	23
(3) 湯原振興局の役割.....	23

1章 湯原地域の概要

エラー! 参照元が見つかりません。エラー! 参照元が見つかりません。エラー! 参照元が見つかりません。

1 地勢

湯原地域は、岡山県真庭市北部に位置し、標高約 265m~625m、東西 17 km、南北 15 km、総面積 141.4 k m²で、山林と湯原ダム湖の面積が約 90%を占め、旭川沿いに狭小な平地が点在する中山間地域である。

2 沿革

平成 17 年に湯原町と 8 つの町村（北房町、落合町、久世町、勝山町、美甘村、中和村、八束村、川上村）が合併して真庭市となった。

«明治 22 年(1889 年)»

- ・三世七原村・田羽根村・湯本村・下湯原村・社村・久見村・釘貫小川村・都喜足村が合併して「神湯村」が誕生
- ・見明戸村・本庄村・豊栄村・禾津村・仲間村が合併して「八幡村」が誕生
- ・種村・栗谷村・藤森村・黒杭村・小童谷村が合併して「二川村」が誕生

«明治 37 年 (1904 年)»

- ・神湯村・八幡村が合併して「湯原村」が誕生

«昭和 15 年 (1940 年)»

- ・湯原村が湯原町となる。人口 4,370 人

«昭和 31 年 (1956 年)»

- ・湯原町と二川村が合併して新「湯原町」が誕生

3 自然

自然豊かな地域で、山々からの清流には、国の特別天然記念物「オオサンショウウオ」が生息している。体が半分に裂けても生き延びるといふ言い伝えや、大きな口を開いたときに体が半分に裂けたように見えることから、別名「はんざき」とも言われている。

「はんざき」は、市営施設「はんざきセンター」（オオサンショウウオ保護センター）にある大型の水槽で飼育しており、自然の中では観察が難しい生態を間近に観察することができる。毎年 8 月 8 日（本祭り）には、「はんざき」にちなんだ「はんざき祭り」を開催しており、湯原地域の夏の風物詩となっている。

また、湯原温泉には、銀鈴を転がすような美しい鳴き声が特徴の「カジカガエル」が生息しており、昭和 19 年にはその生息地として、天然記念物の地域指定を受けている。

4 歴史

歴史面では、260 年ほど前、時の津山藩の圧政に耐えかねた農民が、飢餓のために必要な米の還元と年貢の是正を求めて起こした「山中一揆」で 51 名の義民が犠牲になった。現在、51 名の義民の供養として、山中一揆義民祭が行われている。この一揆は、全国各地で起こった一揆の中でも規模、処刑者数とも極めて大きいものとされている。

また、湯原温泉街から南東へ約 3 km のところにある社地域には、平安時代に醍醐天皇の命で編纂された「延喜式」に記載のある重要な神社「式内社」が 8 つ集まっており、この 8 つの神社は総称して「式

内八社」と呼ばれている。そこには当時の神仏習合思想に基づき、神宮寺として「大御堂」が建立され、現在でも、豊作を祈願し「百万遍」という大きな数珠を大勢で囲み回しながら読経する行事が行われている。同じ社地内には、樹齢 900 年（推定）の大杉が、形部（かたべ）・佐波良（さわら）神社の境内にあり、県下でも屈指の巨木として知られている。

また、二川地域では、「警固行列」という田根神社で行われる秋の大祭がある。3 挺のお神輿にご神体が乗せられお旅所に向かうが、人々に「平穩、平和に暮らしているか？」と問いながら進む道中の中での掛け合いがユニークなのが特徴である。向拔を先頭に大弓、半弓、鉄砲、素槍、白熊槍、狭箱が続き、太鼓や笛の渡拍子に合わせて練り歩く、江戸時代から続く伝統行事である。

5 産業

基幹産業は、農林業と観光産業である。特に湯原温泉は古くから親しまれている。

（1）湯原温泉郷

湯原地域には、湯原温泉、下湯原温泉、郷緑温泉、足温泉、真賀温泉の 5ヶ所の温泉地があり、これらを総称して湯原温泉郷と呼んでいる。温泉郷は、古くから湯治場として栄えてきた温泉地であり、いずれもアルカリ性単純温泉で神経痛や疲労回復などの効能がある。昭和 31（1956）年には、国民保養温泉地の指定を受け、広く全国へ知られる温泉地となった。

1) 湯原温泉

湯原温泉には、川底から砂を噴き上げながら温泉が湧いていることから「砂湯（砂噴き湯）」と呼ばれる混浴露天風呂があり、湯原地域を代表する名所となっている。野口冬人氏（旅行作家、温泉評論家）が、昭和 55 年に発表した露天風呂番付（湯けむりの里：暁教育図書出版発行）において西の横綱に格付けされている。その砂湯の直上に湯原ダム、直下によりそい橋（吊り橋）があり、この砂湯と湯原ダムと吊り橋のダイナミックな景観が湯原温泉を象徴する観光資源となっている。

2) 下湯原温泉

下湯原温泉は、露天風呂と全国的にも珍しいペット専用風呂を設置している日帰り入浴施設（指定管理施設）がある。隣接する「ひまわり館」では、食事や湯原地域の特産品等を購入することができる。周辺には湯原温泉病院、特別養護老人ホームもあり、院内プールや浴槽で温泉を利用している。

また、目前には発電用の調整ダムがあり、下湯原温泉はウォーターフロントとなっている。

3) 郷緑温泉

郷緑温泉は、秘湯の風情が漂う民営一軒宿であり、天然の青みがかった岩盤の割れ目から透明な温泉が湧き出ている。ここでは、豊かな湯量を利用した「スッポン」の養殖が行われている。

4) 足温泉

足温泉には、市営の日帰り入浴施設「足温泉館」があり、現在 4 軒の旅館が足温泉館を内湯として利用している。足温泉は、切り傷、皮膚病に効能があると伝えられ、元亀年間（1570～1573 年）当時の高田城主佐伯辰重（山中鹿之助の妹婿）が、戦で傷ついた武士たちの刀傷を癒すため、樽詰めにした湯を送ったと伝えられ、この故事にちなんで樽（足）温泉と名付けられた。

5) 真賀温泉

真賀温泉は、天然の岩風呂で昔ながらの湯治場の風情を残す温泉地である。地元住民が管理している「真賀温泉館」には多くの湯治客が訪れており、療養温泉としても知られ、昭和 55 年に発表された全国療養温泉番付（暁教育図書出版発行）の西の前頭 3 枚目に格付けされている。

本地域は良質で豊富な湧出量の温泉のおかげで、観光地として栄えてきた。湯原温泉郷では、湧き出

る温泉や温泉を守り続けてきた先人、そして温泉を支えるすべての人に感謝するため、毎年6月26日を温泉感謝デーとして、語呂合わせで「6・26（ろてんぶろ）の日」を行っている。

昭和62（1987）年から全国に先駆けて取り組んでおり、露天風呂（砂湯）の大掃除や、お湯取りの儀（神事）、旅館や入浴施設の内湯無料開放等のイベントを行っている。

6 ダム

湯原ダム（重力式コンクリートダム、堤高73.5m、堤頂長194.4m）は、洪水調整・発電を目的に昭和30（1955）年3月に完成した。当該ダムの有効貯水容量8,600万 m^3 は岡山県内最大であるとともに、ダムによってできた「湯原湖」の面積は4.55 km^2 で中国地方最大である。

また、昭和50年には、このダムを観光資源とし、霞ヶ丘公園やロープウェイが整備され、翌昭和51年には、岡山県の県土保全条例の申請第1号となったゴルフ場、「湯原カントリークラブ」がオープンし、観光地のみならずリゾート地としても多くの客が訪れた。

このように、湯原地域は自然の恩恵を受けながら、それを最大限活用し豊かに暮らしてきた地域であり、本計画でもこの自然や風習、歴史的背景を踏まえ検討を行っていくものとする。

7 新たな取組

湯原地域にはこれまで述べたように歴史のある湯原温泉郷だけでなく、社地区や二川地区の取組が活発になっている。

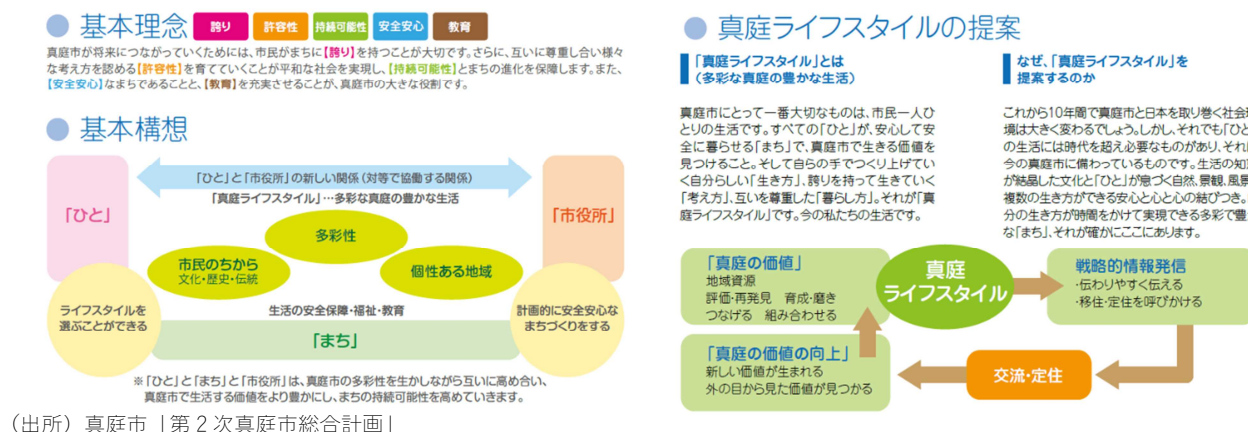
歴史ある大御堂が残る社地域では、八社や大御堂の保存、棚田など自然の活用、地域の足となる「グリーンスローモビリティ」の自主運行に向けた取組など、地域住民が主体となって地域の資源を掘り起こし、魅力を再発見し地域の活性化、或いは地域の維持につなげる活動が行われている。

また、二川地区では、廃校となった旧二川小学校の活用の動きが活発化している。当地域は地域活動が活発に行われてきた地域であり、その活動は地域内の公共施設である体育館や旧二川中学校、旧二川保育園などを利用して行われている。しかし、施設の老朽化により施設そのものの維持が難しくなりつつあり、旧二川小学校の利用が議論にあがってきた。さらに、民間企業から10万冊の古本が運搬され、それらを活用した取組も検討されており、旧二川小学校を地域の拠点として機能を集約し、地域活動の合理化、効率化することで地域活動を維持し、さらには交流事業の推進により雇用を生み出し、地域活動の推進を目指している。

2章 市の関連計画や取組

1 第2次真庭市総合計画

真庭市では、市の最上位計画として平成27年に「第2次真庭市総合計画」を策定している。同計画では「誇り」「許容性」「持続可能性」「安全安心」「教育」を基本理念とし、市民一人ひとりの多彩で豊かな生活を重視した「真庭ライフスタイル」の提案を行っている。また地域・観光振興に関して、「多彩で循環性のある持続可能なまち」を目指し、「多彩な地域の個性を育てる」「地域資源を活かした「回る経済」を確立する」ことを示している。



(出所) 真庭市「第2次真庭市総合計画」

第2次真庭市総合計画における地域・観光振興に関する記載(例)

第5節 多彩で循環性のある持続可能なまち

第1項 多彩な地域の個性を育てる

【施策の方向性と目標】

- 真庭市の自然、歴史、文化などを見つめ直し、維持保全し、伝承し、地域資源を活かした魅力的なライフスタイルを提案していきます。
- 「ひと」と「ひと」、地域と地域の交流により、互いの魅力を認め合うことで、各地域にあった魅力的なライフスタイルが市民の手でつくられていくよう支援します。
- 地域資源を見つめ直し、「掘り起こし(発掘・創出)」や「磨き」「連携(組み合わせ)」により、地域の活性化を進めます。
- 「ひと」と「市役所」が、交流や連携を通じ真庭市への誇りや愛情を持ち、一体となってさまざまなメディアを活用した情報発信に取り組みます。
- 自然環境や里山風景を将来に継承していくため、里山の担い手を育成していきます。

第2項 地域資源を活かした「回る経済」を確立する

【施策の方向性と目標】

- 農林畜産物や景観、文化、伝統などの地域資源を組み合わせた新しい観光の取り組みを支援し、「回る経済」の中の産業として強化します。

(出所) 真庭市「第2次真庭市総合計画」

2 真庭市観光戦略及びアクションプラン

真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟では、市の観光誘客数が低下傾向にあり、基幹産業の一つである観光産業のより一層の活性化が必要であることを踏まえ、平成 29 年に「真庭市観光戦略」を策定している。同計画では「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりを観光振興の基盤に据え、「市民が誇りに思える観光」「回る経済の仕組みの構築」「地域間の相乗効果」等を方向性として示している。

真庭市観光戦略の概要（抜粋）

● 真庭市のあるべき姿、ありたい姿
① 自己実現を果たし、社会で活躍する生き生きとした「人」がいること。 ② 豊かな「自然」と人とが共存する循環型の暮らしがあること。 ③ 市民が地域に「誇り」をもっていること。 ④ 顔の見える人と人との関係があり「風通しの良い」地域社会であること。 ⑤ お互いの関係により、地域社会が「安心・安全」であること。
● 真庭市の地域課題を解決する「観光地域づくり」への期待
① 観光・交流により市民の活躍の場ができ、住民同士のコミュニケーションも活発になる。 ② 地域の魅力を市民が再認識し、若者流出抑制が期待できる。 ③ 「回る経済」の仕組みを構築する。 ④ 旅行者への演出の取組を通して、住環境や景観が維持・改善される。 ⑤ 広範囲に及ぶ取組を通して相乗効果が生まれる。
● 独自の価値を活かした「観光地域づくり」を進めるための具体的計画
① 地域の魅力（独自の価値）の再認識とブラッシュアップ ② 地域の魅力（独自の価値）の発信 ③ 旅行者（お客様）を滞在・回遊させるための工夫 ④ 「観光」を産業にする工夫 ⑤ 受入環境整備

（出所）真庭市及び一般社団法人真庭観光連盟「真庭市観光戦略」

さらに観光戦略を推進するためのアクションプランを策定し、具体的な計画の検討を行っている。

真庭市観光戦略アクションプランの検討事項

● アクションプランの検討事項
① 目的達成のための合意形成 ② 科学的なマーケティング ③ ブランディングとターゲットを明確にしたプロモーション ④ 受入環境整備 ⑤ 魅力的な滞在交流プログラム ⑥ 二次交通の整備 ⑦ 域内経済循環の仕組みづくり ⑧ 担い手となる人材育成 ⑨ 関連する行政施策

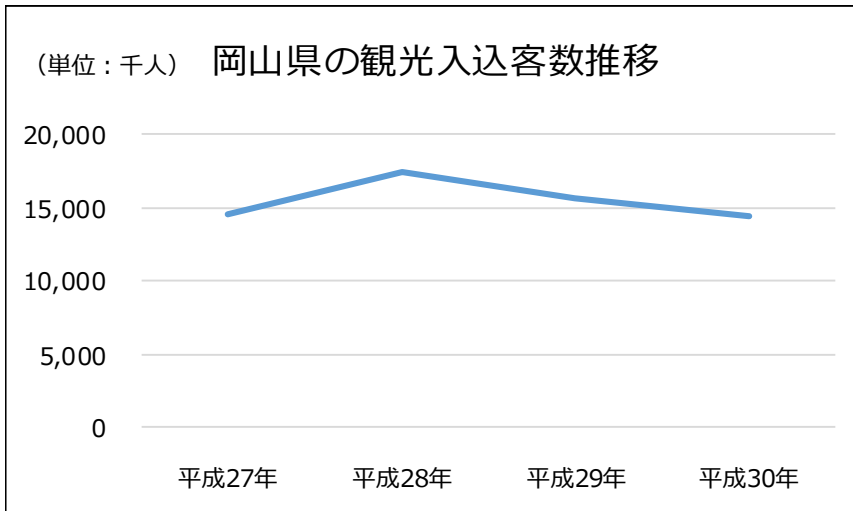
3章 湯原の現状と課題

1 観光客の推移

(1) 岡山県の観光入込客数の推移

平成30年岡山県観光客動態調査によると平成30年の観光入込客数は14,427千人であった。対前年比91.9%であり2年連続の減少となった。

平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
14,488千人	17,404千人	15,695千人	14,427千人

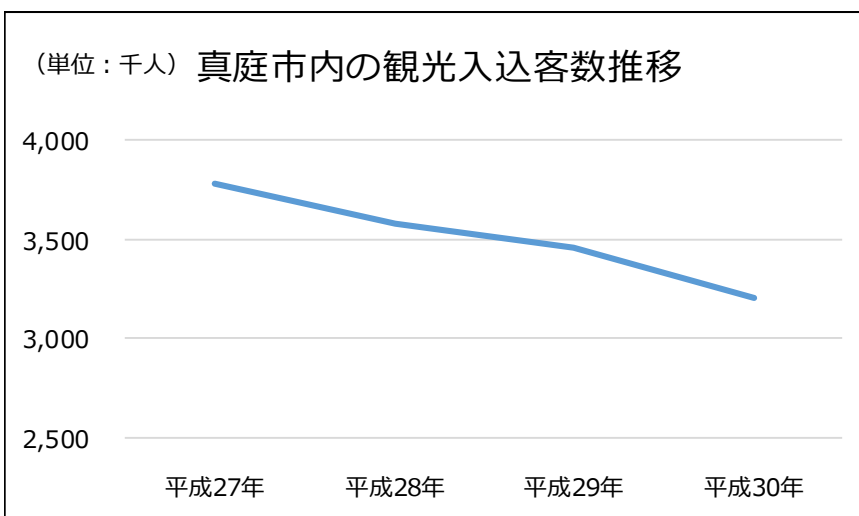


※参考資料 平成30年 岡山県観光動態調査

(2) 真庭市内観光入込客数の推移

真庭市観光入り込み客数調査によると平成27年は3,774,682人であった。令和元年は3,323,659人で、約11.9%減少している。

平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
3,774千人	3,581千人	3,452千人	3,199千人



(3) 湯原・湯原温泉の観光入込客数の推移

平成30年岡山県観光動態調査によると、湯原及び湯原温泉の平成25年には392千人であったが、平成30年は319千人と落ち込んでいる。

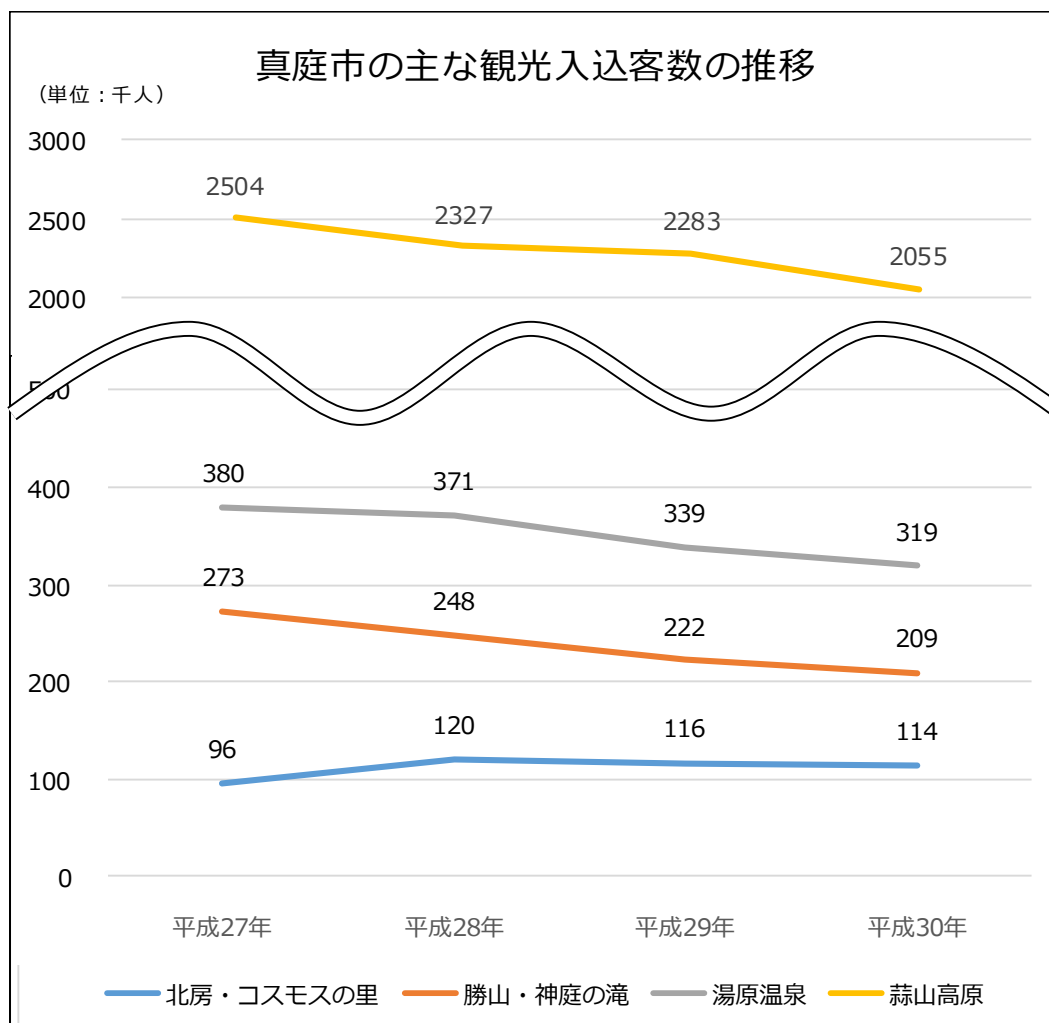
平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
380千人	371千人	339千人	319千人

※参考資料 平成30年 岡山県観光動態調査

(4) 真庭市の湯原地域以外の主な観光入込客数の推移

平成30年岡山県観光動態調査によると、北房・コスモスの里や勝山・神庭の滝、蒜山高原など、湯原・湯原温泉以外の主な観光客入込客数を平成25年と平成30年とで比較したところ、勝山及び蒜山など長年地域の観光を支えてきた観光地が大きく減少している。

観光地名	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
北房・コスモスの里	96千人	120千人	116千人	114千人
勝山・神庭の滝	273千人	248千人	222千人	209千人
蒜山高原	2,504千人	2,327千人	2,283千人	2,055千人



※参考資料 平成30年 岡山県観光動態調査

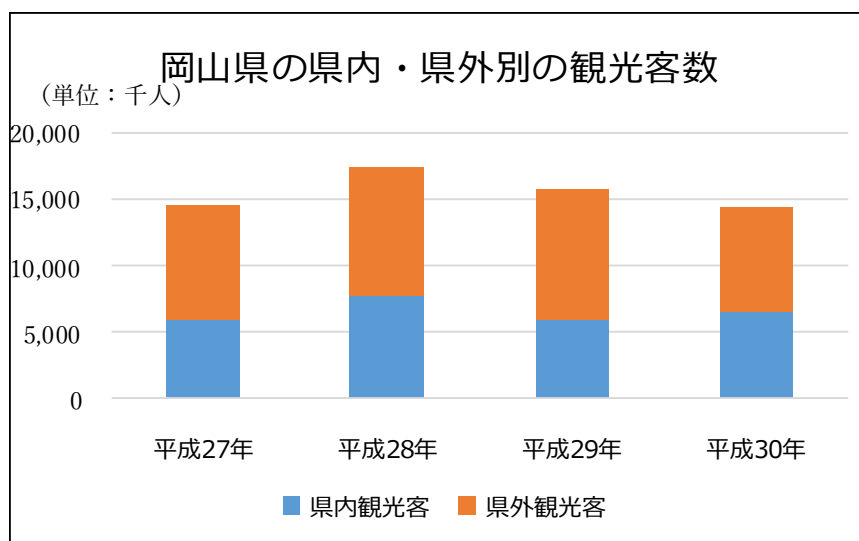
(5) 県内・県外別の観光客数の推移

1) 岡山県の県内・県外別の観光客数

岡山県では平成 25 年以降概ね 60%の観光客が県外観光客となっている。湯原温泉においても概ね同様の割合であると思われる。

(単位：千人)

	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年
県内観光客	5,970	7,707	5,943	6,476
県外観光客	8,518	9,697	9,752	7,951
県外の割合	58.8%	55.7%	62.1%	55.1%



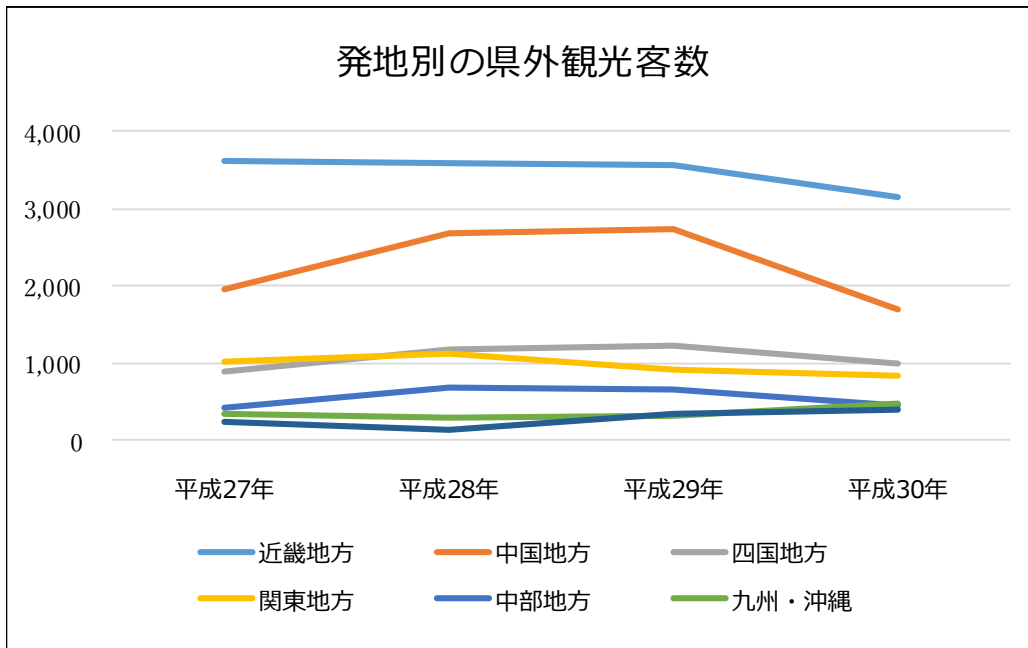
※参考資料 平成 30 年 岡山県観光動態調査

2) 岡山県の発地別の県外観光客数

岡山県へ観光に訪れる観光客の割合が高いのが近畿地方からで約 4 割である。次に中国地方からの観光客で平成 30 年は約 2 割となっている。しかしながら近年その他の地域からの観光客の割合も高くなっている。

(単位：千人、%)

	平成 27 年		平成 28 年		平成 29 年		平成 30 年	
	観光客数	構成比	観光客数	構成比	観光客数	構成比	観光客数	構成比
近畿地方	3,631	42.6	3,594	37.1	3,562	36.5	3,163	39.8
中国地方	1,960	23.0	2,692	27.8	2,731	28.0	1,686	21.2
四国地方	899	10.6	1,180	12.2	1,238	12.7	989	12.4
関東地方	1,020	12.0	1,128	11.6	900	9.2	823	10.4
中部地方	421	4.9	672	6.9	659	6.8	434	5.5
九州・沖縄	349	4.1	300	3.1	319	3.3	463	5.8
その他	238	2.8	131	1.4	343	3.5	393	4.9



※参考資料 平成 30 年 岡山県観光動態調査

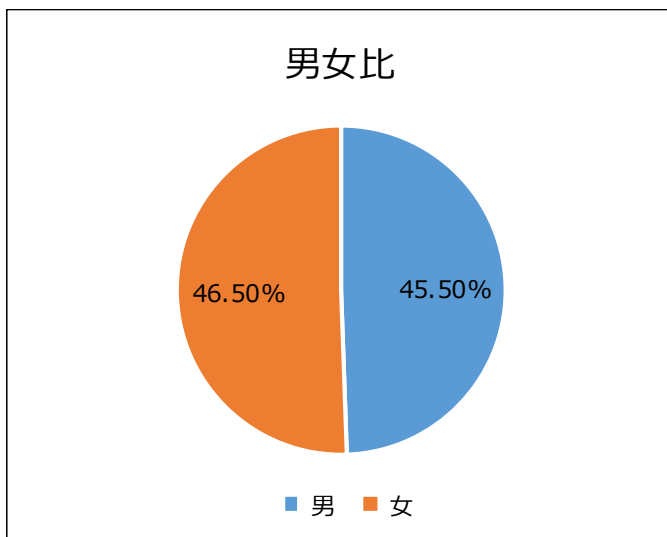
(6) 真庭市の宿泊者の分析

観光予報プラットフォームを利用して、真庭市における令和元年度の宿泊者の分析を行った。

① 性別等

男女比はほぼ同値であったが、他の年度も若干女性の割合が高い。

男	女	小人
45.5%	46.5%	8.0%

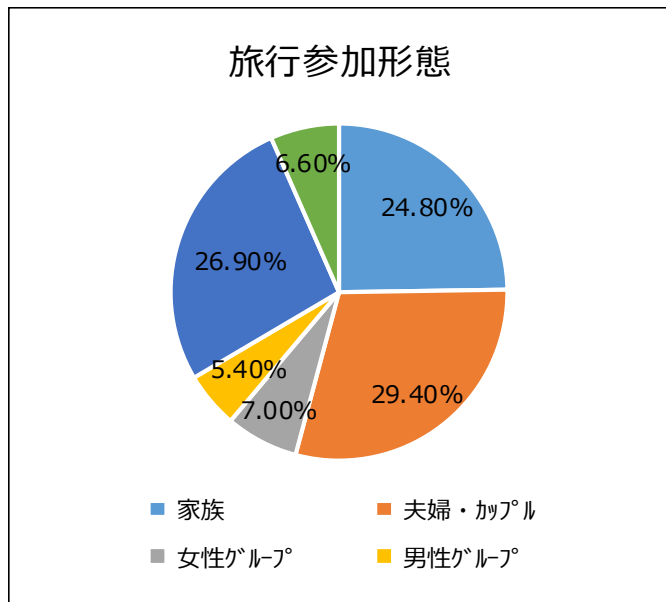


※参考資料 観光予報プラットフォーム

②旅行の参加形態

参加形態では「夫婦・カップル」が最も多く、続いて「男女グループ」、「家族」となっている。

家族	夫婦・カップル	女性グループ	男性グループ	男女グループ	一人
24.8%	29.4%	7.0%	5.4%	26.9%	6.6%

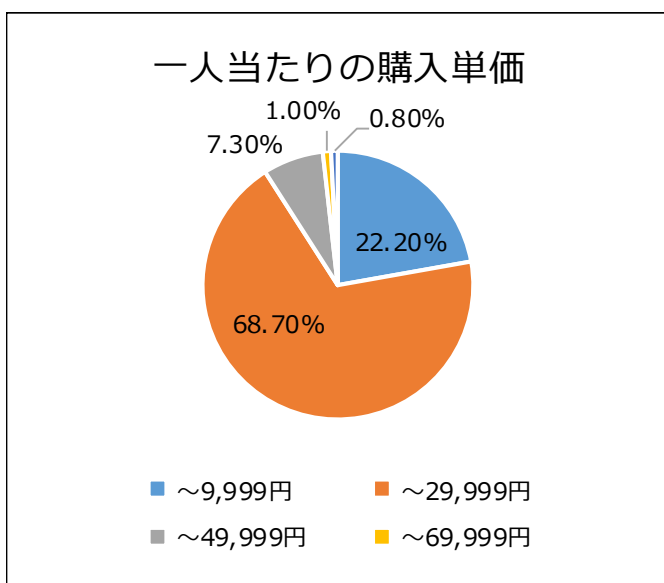


※参考資料 観光予報プラットフォーム

③一人当たりの購入単価

宿泊客一人あたりの購入単価では、68.7%が10,000円～29,999円と最も多く、続いて10,000円未満であった。

～9,999円	～29,999円	～49,999円	～69,999円	～99,999円
22.2%	68.7%	7.3%	1.0%	0.8%



※参考資料 観光予報プラットフォーム

④出発地のランキング

真庭での宿泊者で最も多いのは、岡山県内からの宿泊者で続いて、大阪、広島と近県からの宿泊者が多い。

1位	岡山県
2位	大阪府
3位	広島県
4位	兵庫県
5位	香川県

※参考資料 観光予報プラットフォーム

⑤出発国のランキング

真庭での宿泊者で最も多いのは、香港からの宿泊者であった。

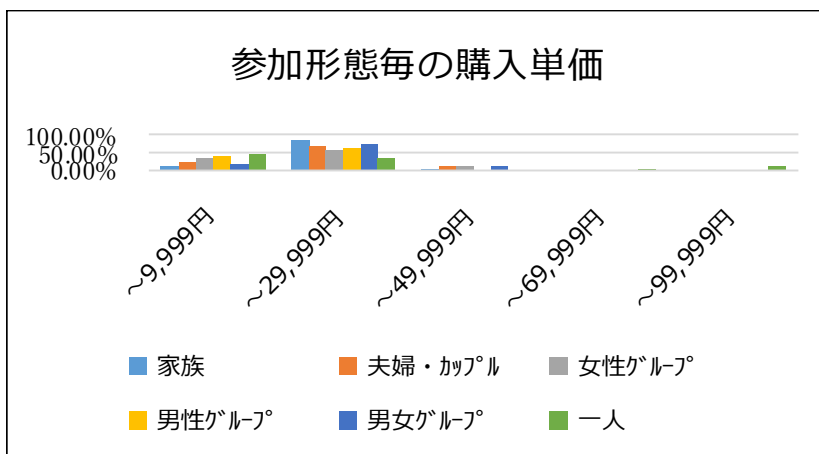
1位	Hong Kong
2位	Taiwan
3位	South Korea
4位	Singapore

※参考資料 観光予報プラットフォーム

⑥参加形態毎の購入単価

参加形態毎の一人あたり購入単価は全ての形態で 10,000 円～29,999 円が最も多かった。特に家族は 84.7%と最も高かった。

	～9,999円	～29,999円	～49,999円	～69,999円	～99,999円
家族	11.6%	84.7%	2.7%	0.9%	0.0%
夫婦・カップル	21.6%	67.3%	10.6%	0.5%	0.0%
女性グループ	32.1%	54.6%	13.4%	0.0%	0.0%
男性グループ	36.6%	63.4%	0.0%	0.0%	0.0%
男女グループ	15.1%	75.2%	9.8%	0.0%	0.0%
一人	47.6%	35.1%	1.9%	7.3%	8.2%



※参考資料 観光予報プラットフォーム

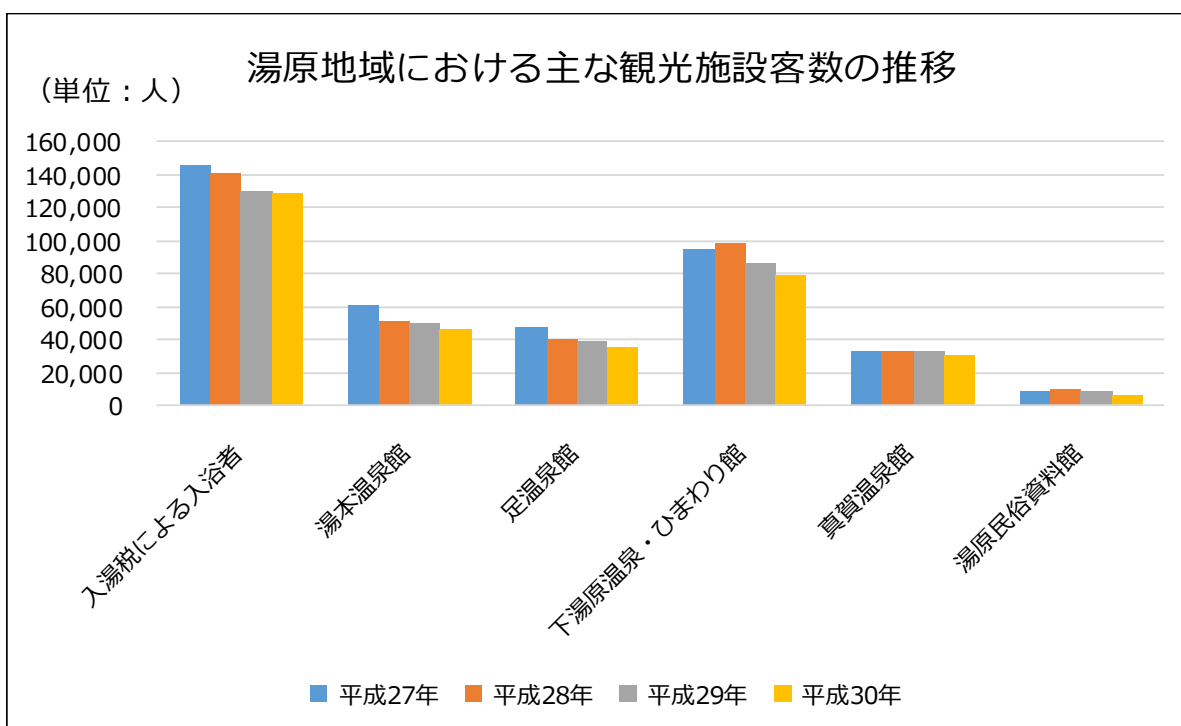
(7) 湯原の観光産業

1) 湯原地域における主な観光施設客数の推移

入湯税や湯原地域における主な観光施設の来客数の推移を比較したところ、全ての施設で減少しており、“温泉”への観光ニーズが変化していることが考えられる。

(単位：人)

	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年
入湯税による入浴者	145,322	141,132	130,424	128,431
湯本温泉館	60,810	51,320	50,322	45,760
足温泉館	47,078	40,798	38,541	35,586
下湯原温泉・ひまわり館	94,710	98,477	86,448	78,710
真賀温泉館	32,529	33,270	32,887	30,567
湯原民俗資料館	8,597	9,501	9,042	6,588
計	395,432	379,827	351,912	330,278



※参考資料 観光予報プラットフォーム

2 考察

真庭市全体では、観光客数は減少している。これは蒜山高原や湯原温泉などの観光客数の減少が要因であると考えられる。しかしながら、その中でも**テーマ性**のある施設が比較的堅調であると思われる。湯原温泉の観光振興においては、観光客の減少が続く中ではあるが、湯原温泉においては様々な取り組みが活発に行われてきた。特に近年では伝統的な温泉地としてのブランドを守りながら、WEBの活用など新しい取り組みも行われている。さらには新しい“まち”づくりも始まろうとしている。

今後も各地域の個性を磨きテーマ性を高めていく必要があるが、そのためにはそれぞれの地域が連携し相乗効果により地域の魅力向上を図っていく必要があると思われる。

⇒ **個性、テーマ性、多様性、愛着、ローカルアイデンティティ** → **地域ブランディング**

2 湯原の取り組み

(1) 湯原温泉郷

① 湯原温泉「まちプロジェクト」

○概要

湯原温泉への宿泊は市外或いは県外からの観光客の割合が多く、古くからの温泉地としてのイメージは作られている。反面、古くからの温泉地としてのイメージが強く、観光客が抱く温泉地としてのニーズとマッチしているとは言えない。第3章の資料にあるとおり、観光客は徐々に減少しており、観光ニーズにあった新しい取り組みが必要である。

湯原温泉は古くから温泉地としての歴史があり、現在も湯原地域、真庭の宝である。

○目指すべき方向性

今後は、各旅館や事業者の努力による観光客の確保は勿論のこと、湯原温泉としての“まち”の魅力を向上させ、古い温泉地としての歴史を残しつつ新しい“まち”としての魅力を高めていく。

また、湯原振興局管内の他地域との連携や真庭市内の他の観光地との連携を強化し、真庭、湯原地域の観光拠点としての宿泊地（終点）としての機能や出発点としての機能を高めていく。

さらに、蒜山地域との連携を強め、“蒜山・湯原エリア”としてのブランディングを行っていく。

同時に、温泉の配湯施設も老朽化していることから、行政と地域とが一体となって更新に向けた体制や取り組みを進めていく。

○実現に向けた取り組み

湯原“まち”再生プロジェクト

空き家の活用など、旅館や地域住民が一体となった取り組みを推進し、“まち”としてのアイデンティティや魅力を高めブランディングしていく。

連携強化と拠点づくり

真庭市内の各地域や観光地などと情報を共有し、互いにPRできる体制づくりに努め、真庭市内の拠点としての機能を高めていく。

“蒜山・湯原”エリアブランディング

令和3年1月に行った蒜山と湯原の観光関係団体代表者によるミーティングにおいて、様々な意見が出された。まずスタートアップとして真庭市内の商品を活用した新しい商品開発を行うなどの案が出た。特産品・ツアーなど連携しやすい商品の開発について検討を進めていく。

②湯本温泉館

○概要

湯原温泉への観光客の減少と同様に湯本温泉館の利用者も減少している。真庭市に合併以降赤字が続いており経営の改善が必要である。また、3階スペースも十分活用されていないなどの課題がある。さらに、源泉を管理する重要な施設であるが老朽化が進んでおり、改修に向けて財政面や管理運用の体制などを計画的に準備、改善を行っていく必要がある。

○目指すべき方向性

湯原温泉における日帰り入浴施設及び土産物店としての魅力や機能を向上する。3階のあまり利用されていないスペースの有効活用を行う。また、現在は直営施設として運営しているが、将来的には指定管理も視野にいれながら、経営改善を行っていく。

○実現に向けた取り組み

経営改善

令和2年度は足温泉館を改修し、「健康」をコンセプトにリニューアルした。令和3年度は湯本温泉館の魅力や機能の向上を目的として、温泉本来の魅力のPRや従業員のおもてなし向上、施設運営体制の見直しなどを行う。さらに、地域観光事業者や行政内の関係部署などと検討を行っていく。

施設の機能向上

これまで以上に温泉の魅力向上は勿論のこと、3階スペースをイベントスペースやワークスペースとしての活用を進める。さらに、活用の推進を目的として、地域事業者との情報交換会や研修などを行う。

配湯施設の管理

施設の効率化と機能強化、源泉の管理体制の改善に向け、研修会を開催するなど地域観光関係者との連携を強化する。

③足温泉館「健康温泉」

○概要

湯本温泉館と同様の日帰り入浴施設であるが、湯本温泉館と比べて市民の利用率が高い。湯本温泉館と同様に赤字が続いているが、令和2年度には効率化や魅力向上を目的に改修を行い、「健康」をコンセプトにリニューアルした。令和3年度以降は魅力を広くPRし利用者の増加を図っていく必要がある。

○目指すべき方向性

“健康”をコンセプトに、肌に優しい癒やしの健康温泉として足温泉本来の魅力を高め情報発信していく。

○実現に向けた取り組み

健康温泉としてのブランディング

家族風呂であったスペースを“健康”スペースとし、体組成計などの測定機器やポスター、パンフレットなどを設置し、週に一度測定する「**シューイチ温泉**」或いは月に一度測定する「**ツキイチ温泉**」としてリピーターの増加を目指す。

家族風呂の利用促進

比較的購入単価の高い家族風呂をアピールすることで、全体の顧客単価をあげていく。また、予約制の導入も検討し、利用客数の増加を図る。

(2) 下湯原温泉・ひまわり館「下湯原温泉パーク」

○概要

他の温泉施設と同様に利用者の減少が続いている。露天風呂に関しては、平成22年の36,627人から令和元年には19,586人(約53.5%)まで減少している。露天風呂である下湯原温泉単独での利用者の増は非常に難しいと考える。その為、隣接するひまわり館の魅力を高めることや入浴しやすい露天風呂として施設を改善するなどし、温泉利用者の増加を目指していく必要がある。

さらに、周辺にはペットと入れる温泉「わんこあん」があり、それらの周辺施設を一体として、自然や動物と楽しめる下湯原温泉のエリアとしての魅力を向上させていく必要がある。

○目指すべき姿

「下湯原温泉」や「ひまわり館」、「わんこあん」、など自然や動物と楽しめるゾーン「下湯原温泉パーク」としてブランディングを進めていく。自然や動物と楽しめるエリアとしてキャンプ場やRVパークなどが考えられる。湯原温泉にある湯っ足り広場(RVパーク)は毎年前年比100%を超えるなど観光客のニーズが高まっている。購入単価でみても、湯原温泉に宿泊する客一人あたりの購入単価が10,000円~29,999円の層であると考えられるが、キャンプやRVパークなどは10,000円未満であり、ターゲットが異なるため、湯原地域全体の魅力向上に繋がる。

さらに、ひまわり館の地域の農産物の集荷拠点としての機能や飲食店、食料品の販売など観光客は勿論であるが、地域の拠点としての機能を高めることで集客を推進し、下湯原温泉・ひまわり館としての地域における役割を高めていく。

○実現に向けた取り組み

下湯原温泉の魅力向上と効率化

露天風呂の魅力を活かしつつ、タープなどで寒さや風雨対策などを行う。魅力向上を図ると同時に、気温や天候に影響されやすい温泉温度対策を検討する。

地域拠点としての機能の向上

ひまわり館においては、周辺地域との連携を図り、野菜の集荷場や飲食店、食料品店としての役割を強化する。特に社地域との連携においては、地域特産品の販売店としての役割が大きい。同様に、公共交通の拠点としての役割について検討をすすめる。

施設の有効活用

RVパークやグランピングなど観光ニーズに対応した取り組みの検討をすすめる。現在ひまわり館・下湯原温泉敷地内にある使用されていない施設の積極的な活用をすすめる。さらに下湯原エリア内に計画されているドッグラン施設などとの連携を強化する。

(3) 社の式内八社「歴史交流」

○概要

これまで歴史勉強会や特産品開発など、地域資源を活用した取り組みを実施してきており、地域組織も体制が整っている。また、大御堂など歴史的な価値があり、地域資源となり得る歴史的建築物も活用が進んでいる。しかしながら、地域の意識は醸成されつつあるものの、これらの取り組みを自主的、持続的に継続させていくためには、歴史資産の価値を高め交流事業や地域産業へと発展させる必要がある。さらに、事業により開発された“やしもち”などの特産品の販路拡大やグリーンスローモビリティを活用した地域の足（公共交通）の確保、同じくグリーンスローモビリティを活用した観光ガイド（交流事業）などを推進していく必要がある。

○目指すべき方向性

社地域においては、地域の課題抽出や地域資源の発掘、地域住民への啓発、体制づくりは進んでいるため、今後は、地域の取り組みを「歴史、環境保全」「地域産業の推進」「生活環境の維持、向上」に区分し、行政と地域とが一体となってより具体的に取り組みを行っていく。もちをはじめとする特産品では、地域が考えた“売りたい商品”ではなく、例えばひまわり館など販売店からの視点で“売れる商品”づくりを行っていく。その為にも他地域や事業者との連携が必要になり、湯原振興局の役割として推進していく。

○実現に向けた取り組み

歴史的価値の向上

勉強会やシンポジウムなど学術的な専門家によるイベントにより、歴史的な価値について広く啓発するためのブランディングを行う。

歴史資源の活用

歴史資源とグリーンスローモビリティを活用した観光ツアーなど交流事業を推進する。しかしながら、社地域単独の取り組みでは困難であるため、ひまわり館や湯原温泉、観光局などとの連携を強化する。

売れる商品作り

これまでの事業により開発した“やしもち”などの商品を中心に商品開発を行う。商品開発にあたっては、地域の拠点施設となり得る“ひまわり館”と連携し、売りたい商品づくりから売れる商品づくりを目指す。

地域の足（公共交通）

地域の足の確保に向け、くらし安全課や交流定住推進課などと足並みを揃え支援していく。

(4) 二川の地域づくり「地域自治振興モデル」

○概要

二川地域は湯原の中でも地域活動が活発な地域であり、これまで特産品開発や地域づくり事業などを行ってきた。令和2年度からはデマンド式による“まにわくん”を受託し地域の足を確保する取り組みも始まっている。一方、少子高齢化、人口減少が進み、これまでの地域づくりの体制では継続が困難になりつつある。そのため、これまでのピラミッド型の地域づくりの体制に加え、地域においてやりたい人がやりたいことに意欲的に取り組める組織や支援が必要になっている。

さらに、老朽化した公共施設も多く、施設の整理統合が必要になっている。

○目指すべき方向性

個別の多様な取り組みを旧二川小学校へ集約し、住民自治や地域自治の拠点施設として整備する。さらに、老朽化した施設については、取り壊しなどを積極的に進める。

さらに、令和2年6月に搬入した漫画10万冊を活用し、地域産業の推進を目指す。漫画の活用にあたっては、地域外の事業者などと共同で取り組みを進め、地域経済の推進による雇用の創出と自立性持続性を高めていく。

行政は地域自治振興センター（仮称）制度の設立など「地域自治」「住民自治」における新たな自治スタイルの確立に向け支援していく。

○実現に向けた取り組み

地域自治振興センター（仮称）の開設

旧二川小学校への機能移転を進め、地域自治、住民自治の拠点である地域自治振興センター（仮称）の開設に向けた取り組みをすすめる。同施設の運営は、新たに地域で設立する法人による指定管理施設としての運営を目指す。

住民自治と地域産業の推進

10万冊の漫画を活用した「漫画館（仮称）」の開設をはじめ地域住民によるカフェや自然体験イベント、交流イベントなどを支援する。

(5) 天然記念物「はんざき」**「自然・地域環境保全」**

○概要

真庭市においては、北部全域がはんざきの保護指定区域になっている。平成29年4月に「はんざきセンター」をリニューアルオープンし、おかやまオオサンショウウオの会の保護活動の活動費確保のため館内にはんざき募金箱を設置許可した。平成30年8月には、はんざきの身体測定実施。翌年10月には日本オオサンショウウオの会真庭（全国）大会を開催している。令和2年度は一般来館者向けの月2回の給餌体験及び生態説明イベントを計画し、委託（シルバー人材センター）により実施した。

これまで様々な取り組みを行っているものの、天然記念物の保護については、保護交雑種や災害による河川状況の変遷、旭川の井堰等によるはんざきの個体数減（約300→150）が課題となっており、対策が必要である。対策にあたっては、行政が大きな役割を担っているものの、湯原には「おかやまオオサンショウウオの会（事務局：湯原観光協会内）」があり、行政と当会が連携して保護活動に取り組んでいく必要がある。

○目指すべき方向性

おかやまオオサンショウウオの会と歩調を合わせながら、はんざきセンターの運営や啓発を積極的に行っていく。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で予定していた回数を実施できなかったイベントや保護交雑種や個体数の減少に対する取り組みなど、専門家も交えすすめていく。

また、湯原観光協会などは観光資源としても活用を検討しており、保護団体や観光団体等と保護やPRに効果的な取り組みをすすめていく。

○実現に向けた取り組み

交雑種・個体数減少への対策

交雑種と災害等の河川変形、井堰等によるはんざきの個体数減対策をすすめる。おかやまオオサンショウウオの会等の協力を得て、はんざきの身体測定イベントの実施（年1回）。図書館又は公民館関連事業として、はんざき講座を実施する。

啓発イベント

一般来客者向けの給餌体験・生態説明イベントを積極的に行っていく。

はんざき山車車庫の改修

令和3年度に予定している地域住民によるはんざきの山車の改修に合わせ、はんざきセンターに隣接する山車車庫の改修を行う。これによりはんざきセンターと山車車庫のはんざきエリアの魅力向上を図り、湯原ふれあいセンターとはんざきセンター、はんざき山車車庫（はんざきミュージアム）の周遊性を高めていく。

3 地域観光の振興に向けての取り組みの整理

(1) 課題の整理

地域観光の振興においては、これまでの取り組みの継続やブラッシュアップが重要である。しかしながら、人口減少や高齢化により地域の“ひと”の資源が衰退しており、これまでの取り組みの維持が困難になりつつある。今後、地域を持続的かつ自立的に維持或いは発展させるためには、地域が連携し「強みを活かし弱みを補い合う」仕組みを構築する必要がある。

(2) 課題解決に向けて

それらの課題を解決するためには、個々の取り組みの持続やブラッシュアップは勿論であるが、それらを、地域観光の推進という方向性や目的を共有し、互いに連携していくことが必要である。目的の共有により個別の取り組みそれぞれに新しい機能や役割が付加され、ひとや機能を共有することで業務が効率化されていく。

(3) 地域振興のステップ

湯原振興局では、地域の取り組みを以下の表とおり区分（縦軸）した。そしてその取り組みの段階をSTEP1 からSTEP3（横軸）に区分した。そして、地域観光の推進の目的が表の右上の項目になる。各取り組みはSTEP1 からスタートし、STEP3 を目指していく。そしてさらに、それらを地域観光の推進という方向性に向かって連携させる。

このように一つひとつの取り組みを連携させ、エリアとして観光の仕組みを作ることで、新しい観光ニーズに対応できた湯原らしい観光スタイルが生まれる。

【地域観光の振興に向けた取り組みの整理についての考え方】

区分	STEP1 ※ひと・ものづくりの段階	STEP2 ※仕組みづくりの段階	STEP3 ※実践の段階
観光		・社（式内八社）	・湯原温泉 ・下湯原パーク
地域づくり （交流）	・二川地域づくり組織 ・湯原温泉空き家活用	・二川（漫画館）	
地域づくり （その他）		・社（グリスロ）	・二川（公共交通）
スポーツ			・クライミング
文化		・社（式内八社）	・ガラス工房
福祉		・ウォーキング ・湯本温泉館	・足温泉館

4 推進に向けての体制

(1) 真庭観光局と湯原振興局の連携体制

地域観光の推進にあたっては観光客にそれぞれの観光施設の魅力を伝えることは勿論であるが、湯原地域或いは蒜山地域、勝山地域、広くは真庭地域などエリアとしてのイメージを持ってもらうことが重要であると考えている。

しかしながら、真庭市においては、エリア情報の発信は真庭観光局が一定の役割を果たしているものの、個々の施設の情報についてはそれぞれの施設が行っており、その情報共有されていない現状がある。観光客に観光エリアとしてのイメージを持ってもらうためには、関係者自身が共通の地域観光のイメージを持つておく必要がある。

それらの課題を解決していくため、地域間の情報交換を活発にし、他の地域を学び、その上で湯原や蒜山、勝山などそれぞれを中心としたプランの提案を行っていく。この提案はツアーやイベントを開催するというものではなく、エリアとしてのイメージを持ってもらうことを目的としたストーリーを作る取り組みである。これまでは真庭観光局が主にその業務を担ってきたが、各事業者や地域もその役割を積極的に担っていく必要があり、湯原振興局では地域とのつなぎ役を担う。

プランの例)

- ① 歴史堪能プラン 勝山→湯原温泉→社
- ② 自然堪能プラン 二川→湯原温泉→二川
- ③ 湯原堪能プラン 社→湯原温泉→二川
- ④ 真庭満喫プラン 勝山→湯原温泉→蒜山

さらに、真庭観光局と行政それぞれの強みは情報発信や誘客と資源開発である。真庭観光局が把握した観光ニーズを湯原振興局が地域に繋ぎ、資源開発に反映させることで、観光ニーズにあった**商品づくり**が可能になる。

(2) 湯原観光関係者等を中心とした連携体制

現在、月一回程度、観光協会、旅館組合、行政とで情報交換を行っている。その中では旅館事業者だけでなく、地域住民や他の地域との連携を進める方向性が示されている。そこで提案された湯原温泉における“まちづくりのプロジェクト”は地域の一体感を高め新たな観光資源（物語）を生み出すことが可能であると考えている。

(3) 湯原振興局の役割

湯原振興局では地域組織を連携し資源開発、地域観光の推進に向けた商品開発のサポートなどを行っていく。商品開発にあたっては、“売りたいものづくり”から観光ニーズにあった“売れるものづくり”へと変革を進めていく。

